

別紙（事後評価書）

令和4年度文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）

<p>通し 番号</p>	<p>12</p>	<p>事業区分： 劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業 助成対象団体名： 公益財団法人北九州市芸術文化振興財団 施設名： 北九州芸術劇場</p>
<p>助成対象活動に関する評価</p> <p>（妥当性）</p> <p>平成30年度から令和2年度までの北九州芸術劇場のミッションは、北九州市が策定した「まちづくり基本構想」及び「北九州市文化振興計画」の4つの基本方針（「人づくり」「暮らしづくり」「産業づくり」「都市づくり」）を文化芸術分野で担うとしていた。令和3年度からは、「北九州市芸術劇場の基本方針」に定める3つの基本方針「賑わいの拠点」「地域文化の拠点」「文化創造の拠点」に変更された。また、平成30年度に4つの事業コンセプトとして掲げた「観る」「創る」「育つ」「支える」については、令和3年度自己点検報告書において、ビジョンに変更されていた。</p> <p>新型コロナウイルス感染症の影響により、海外からの舞踊集団の招へいやアウトリーチ活動など、実施を断念せざるを得ない状況となったが、地元音楽家たちを有効に活用した北九州独自の公演の充実や市民との共同創作による演劇公演など、行動制限が生じた環境に屈することなく、舞台芸術の提供に努めたことは評価できる。</p> <p>当初の計画段階から地元で活動するアーティストの活用を積極的に図り、演劇創作の過程を通して、コミュニケーション力や表現力を養うプログラムを提供した。また、障害者やその家族と共に、参加者の個性を生かしながらクオリティの高い作品を創作するなど、助成に値する文化的、社会的意義が認められた。</p> <p>令和4年度については、特に地域の文化資源や人材を活用した取組は評価が高く、当初の予定どおり事業が進められていた。</p> <p>ミッション及びビジョンの変更により、当初の事業計画との整合性は不明確であるものの、事業計画に必要な構成要素が有機的に関連し、当初の予定どおり事業が進められていたと一定程度認められる。</p> <p>（有効性）</p> <p>当初掲げた4つのアウトカム「知的財産の流通」「創造源の確保」「新たな発想（価値）を生み出す環境づくり」「調査研究・発信」のうち、「調査研究・発信」については、目標・指標の設定がなく事業計画と関連しておらず、アウトカムの発現は認められなかった。</p> <p>「文化芸術による創造的な地域の活性化と都市の再生」とした大目標は、2つの目標に大別され、各々3つずつの小目標が設定されており、都合6つの目標で構成されている。目標には多くの要素が混在しており、アウトカム、目標、指標の整合を困難にしている。</p> <p>目標「舞台芸術活動の地域への浸透」における「九州圏域における舞台芸術の多様性の喚起」及び「地域課題への取り組み」については、演劇公演が62%で目標を若干下回ったものの、舞踊公演はコロナ禍の状況下にもかかわらず、38%と目標を上回り健闘した。また、「大学ラボ」や「ひとまち+アーツ協働事業」などの地域課題への取組は、コロナ禍の影響を受けて、規模を縮小し感染症対策を講じながら地道な展開に努めた。</p> <p>目標「舞台芸術を生かした都市づくり」における「長期継続事業における舞台芸術作品の創造・発信」及び「地域にある多様な主体との連携・協働」については、市民参加型事業の「Re:北九州の記憶」が顕著な歩みみせたほか、地域資源発掘・活性化等の創造事</p>		

別紙（事後評価書）

業を年間2事業実施する目標をおおむね達成した。また、地域にある多様な主体との連携・協働については、4分野の維持にとどまった。

令和4年度については、全20事業の内、新型コロナウイルス感染症の影響を受けた事業等を除き、7事業が目標を達成し、ほか6事業も目標に対して平均85%の実績を示した。特に、市内外からの観客が来場した舞踊の海外招へい事業及び、北九州と東京の2拠点で上演した市民共同創作劇『Re:北九州の記憶』は、当該劇場・音楽堂等の役割を十二分に果たす結果となり、地道な健闘が事業の成功に結び付いた。

上述の目標・指標は、アウトカムとの連関がありおおむね達成したと認められるものの、「劇場ファン層の増加」「事業に関わる地域の表現者、スタッフの育成」「幅広い年齢層に向けたアプローチ」「国内外へ向けた情報発信による支持者の拡大」の4つの指標については、3つのアウトカムとの連関が乏しく、アウトカムの発現を確認できない。

（効率性）

事業はほぼ計画どおり実施されており、事業期間は適切であったと認められる。

また、事業費については、要望時の予算額と報告時の実績額とを比較すると、一部の費目に増減があったものの、ほぼ計画どおり執行されており、適切であったと認められる。

（創造性）

平成30年度から令和3年度までにおいて、安定的かつ活発な事業の推進を図ることができた『Re:北九州の記憶』は、10年間の節目を迎え、多様なステークホルダーの支持を得た。北九州市に暮らす高齢者の記憶から地元の若手劇作家が戯曲を執筆し、地元の俳優が演じて舞台化する本活動は、若手演劇人の育成のみならず、個人に埋没していきがちな記憶のまち北九州を可視化することで、次代に語り継ぐことを可能とし、世代を超えたコミュニケーションツールの一つとして評価できる。

クリエイション・シリーズは、第一線で活躍する表現者をクリエイションパートナーとして位置づけ、2年間にわたり作品を仕上げていく取組である。コロナ禍の中、苦戦を強いられるも、九州を拠点とする俳優の活用や地元題材をフィールドワークにより書き下ろすなど、丁寧な創作活動が功を奏した。一方、『まつわる紐、ほどけば風』では、多様な女性の生き方を2時間弱でまとめたことにより、人物造形や細かな心理描写の掘り下げ等に不足が生じた。

平成31年度に実施した『ギミックス』については、振付家の緻密に計算された世界観を、地域のダンサーの個性と巧みな技術によって質の高い作品に仕上げられており、3ヶ年をかけた段階的かつ丁寧な取組の結実として評価できる。また、当該作品で宮崎と熊本へのツアー公演を実現したことも、意欲的な取組として評価できる。

令和4年度については、演出や舞台美術などに課題が残ったものの、九州を拠点に活動する芸術表現者を多く起用し北九州独自の作品を創造した。また、観光と文化資源を効果的に組合せたユニークな取組が際立った。小学生を対象にした演劇ワークショップでは、講師との交流活動が促進され、児童の想像力や表現力を高めた。舞踊の海外招へい公演は、今日的なテーマを内包した名作を紹介し市内外の来場者に刺激を与えた。

以上のことから、事業内容が、独創性、新規性、先導性等に優れており、事業の実施によって、当該劇場・音楽堂等の国内での評価の向上につながったと認められる。

（持続性）

別紙（事後評価書）

平成30年度より組織目標のコンセンサスづくりと個人の能力を最大限引き出し、活用する方法を検討した。令和2年度からは、キャリアアップ制度の導入、専任チーフポストの配置、主任総合職の定期昇給制度、専門人材のジョブローテーションの開始など、地道な運営体制の整備に取り組んでいる。一方、いまだ有期雇用職員や人材派遣職員が多くを占めており、今後より一層、安定的かつ効果的な雇用環境の充実に努めてほしい。

北九州市より、平成31年度から5年間の指定管理者の指定を受け、指定管理料収入を基礎とした財政基盤を確保しているものの、寄付金や協賛金などの多様な財源確保にまで至っていない。今後は、多元的な外部資金の調達に努めると共に、経営基盤を構築しつつ、劇場機能の強化を図ることを期待する。

令和4年度については、令和3年6月に着任した新理事長が運営財源の獲得と経営基盤の強化を図る目的で、経営企画室を新設し組織改革に努めた。また、劇場のブランディングと収益化を狙い、積極的な資金調達に動き出した。一方で、組織面においては制度的な課題もあり、改善に努めてほしい。

以上のことから、事業計画を通じて組織活動が持続的に発展し、持続的なアウトカムの発現・定着が期待できるよう努めてほしい。

（総 評）

地域の特性を生かし、地元の人材を有効活用しつつ、良質な事業を実施しているものの、ミッションに基づく、アウトカム・目標・指標・事業計画までの一連の流れが不明確である。今後、当該劇場・音楽堂等の社会的役割を再度明確化し、安定的な事業運営を行うための組織体制の充実及び、多元的な外部資金の調達など、総体的な観点から、劇場経営の機能強化に努めることを期待する。

令和4年度については、九州出身の芸術表現者を多く起用し、地域に密着した事業を展開する一方で、鑑賞機会に恵まれない不朽の名作を上演するなど、九州圏域の実演芸術活動を牽引した。特に地域資源が豊富な北九州の強みを生かした取組は、当該劇場・音楽堂等の独自性を際立たせた。また、児童から年配者までを対象とした普及啓発事業の取組は確実に定着し、当該劇場・音楽堂等が地域コミュニティの創造と再生に貢献した。

以上により、戦略的な事業計画を実行していたと認められる。